# ISに黒い究極の針鼠と音速の青い針鼠が来た

MS-07SP　グフ万能使用格闘特化型

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳに黒い究極の針鼠と音速の青い針鼠が来た

【Ｎコード】
Ｎ１０３４Ｙ

【作者名】
ＭＳ－０７ＳＰ　グフ万能使用格闘特化型

【あらすじ】
アークの衝突を回避した二匹の針鼠は、別世界で何を見て何を信じるのだろうか

相変わらず作者は文章が下手です。
何があっても大丈夫な心の広いひとのみお願いします。

# プロローグ

「「カオスコントロール」」

僕とソニックは、間違いなくプロトタイプもろともアークを飛ばしたはずだった。

だが気がつくと何処かに倒れていた。

「ここはどこだ」
知らない天井もといい違う世界だと直感的に感じとった。
「目が覚めたようだな」
突如としてかけられた声に思わず臨戦態勢を取る
後で考えてみれば無駄な誤解を与えるだけだったと思う。
「こちらに敵対の意思はない」
確かに向こうは、何も武器を構えていなかった。
とりあえずある程度の警戒は、解かず臨戦態勢を解除する。
最もその気になれば目の前のたかが女一人ぐらい軽く倒せると思うが。
「流石にそう簡単に気を緩めることは、出来んだろう。
それはさておき本題に入ろう
お前の名前は、何だ。そしてどこからここにはいったんだ。
それとこれは何だ。
そしてお前は、何者だ。
そしてこいつは誰だ。貴様と姿が似ているが・・・・・」

「それは・・・・・・
僕の名前は、シャドウ　シャドウ・ザ・ヘッジホッグだ。
二つ目の質問だがわからない
三つ目の質問だがそれはカオスエメラルドだ。
四つ目僕は、作られた究極生命体だ。そして彼はソニック　ソニック・ザ・ヘッジホッグ『冒険好きのただの針鼠』だそうだ。」

「お前たちには男のはずなのに説明したＩＳの適性があった。しかも計ることができないほどだ。そこでこの訓練機に触れてほしい。」
「了解した。」
シャドウたちは、共に打鉄とラファールに触れた。
「なっ！」
驚くのも無理がない彼等が触れたＩＳは、コアネットワークから完全に遮断され新たなＩＳ「アロンダイト」と「カリバーン」になった。

どうやらこのＩＳ学園なる場所に入学することになるらしい。
入試の模擬戦をしなければならない。最も生身でも勝てるとは、思

うが。

相手のＩＳとやら大きい　確かに大きいが奴？プロトタイプ？に比べると小さい。
ご丁寧にエメラルドは、七つ全て揃っている。
軽く遊んでやるとするか。

「初め」
その一言が言われたと思うと相手側のＩＳは、もう吹き飛んで解除されていた。
かかった時間０，００１
「下らんガラクタどもめ」

はっきり言って弱すぎる
あれでは、Ｅ－１００００２にも勝てんだろう。
人工カオスなど持っての他だ。

私織斑千冬は、驚きを隠せなかった。
何故なら世界最強のＩＳを訓練機とはいえ生身で
しかも一瞬で倒したのだ
私は、自分の中に恐怖と闘争心が芽生え訓練機を借りることにした。

つぎの相手は、どうも気配が先程の相手と違う。
少しは、力を使うとするか。

「カオススピア」
小さく鋭い針のようなものが遅いかかる

結果は、シャドウの完封だった。
別の部屋のソニックも同じだったそうだ。
私は、自分自信化け物だと思っているだがその上を行くものが存在するとは思っていなかった。
シャドウ・ザ・ヘッジホッグか
いつか一矢を報いるために私は、まだまだ訓練を重ねる必要があるそうだ。

## プロローグ（後書き）

ソニックとシャドウの容姿は、基本的に針ネズミからかわっていません。

## 入学と伝説の始まり

Ｉｔ　ｄｏｅｓｎ'ｔ　ｍａｔｔｅｒ（ＳＡ１ｖｅｒを脳内で流して下さい。）
俺の名前はソニック　ソニック・ザ・ヘッジホッグだ
前回突如として転移してしまった世界にはＩＳとかいうマルチフォームスーツがある世界だった
しかもカオスエメラルドが全て２つになっていて合計十四個になったんだ。
なんかそのうちエッグマンの野郎とかもきそうだぜ
だけど頼むからエミーには来てほしくないな

とソニアドのあらすじ紹介ぽくしてみたｂｙ作者

という訳で僕達は、今１－１の教室の前にいる針鼠の姿だったんだ
がどうやら人間の姿にもなれるみたいだ
なんだかわからんが便利だな。最もスピン系はすこし使えなくなる
ものもあるようだがこの世界ではそんなものなくてもそこそこ戦え
るからたいして不便ではない
ソニックはどうか知らないが

時間がたちすぎに見えるが実はまだこの世界に来て2日（実質1日）
しかたっていない
今は、織斑教諭に呼ばれるまで教室で待機しとくように言われたの
でソニックと少し技のだしあいをして暇を潰している
因みに同じクラスなのはいろいろ調整が違うクラスにすると大変だ
からだそうだ。
あと僕たちは双子ということにしている。人間の時の姿が瓜二つで
髪の色が違うだけだったからだ。
「ソニック、シャドウ入ってこい」
僕たちは呼ばれてとりあえず教室の中に入った。ほぼ女子校という
ことを忘れて

「きゃあぁぁ」
「男が二人も」
「しかもイケメンで見た目クール系」

黄色い悲鳴が聞こえる
大丈夫なのかこの学校
仮にもエリート校なのだろう
「シャドウお前から自己紹介してくれ」
目でうなずき
一息おいて自己紹介をかるくする
「僕の名前はシャドウ　シャドウ・ザ・ヘッジホッグだ。特技になるかわからんが重火器の扱いと整備ならある程度できる。」
さすがにこれを言えば黙ると思ったが甘かったようだ。
また黄色い悲鳴が聞こえる
あとはソニックに任せる
「俺はソニック　ソニック・ザ・ヘッジホッグだ。特技は走ることで好きな食べ物はチリドックだ」
また黄色い悲鳴か。頭が痛い。

あれからしばらくしてもう一人の男である織斑一夏に話しかけようとしたら誰かにつれていかれ金髪ロールの明らかにお嬢様というオ

ーラを出している多分エリートであろう人物が話しかけてきた。
「ちょっとよろしくて」
「よろしくないな」
「まぁなんですかそのお返事はこの私に話しかけてあげたのですからそれだけでもそれ相応の態度があるのではなくて」
「悪いが僕たちは君のことを知らないというより昨日急きょ入学することになったからな」
「この私を知らない
入学首席にしてイギリスの代表候補生であるこの私セシリア・オルコットを
というか昨日ってなんですの」
「代表じゃなくて代表候補なんだな」
「読んでじのとおりであれば世界中の女性全員になるがわざわざいうくらいならエリートとやらだろう」
「そうエリートなのですわ」
「で　そのエリートさんがいったいなんのようで」
「貴方私の質問を無視するとはいい度胸じｙ『もうチャイムがなる時間なので先に失礼させていただく』ちょっとまだ話は終わってｎ『さっさと席に着かんか馬鹿者！』」

凄い痛そうな音が聞こえた。

あれからしばらくしてクラス代表を決めることになった。
「私は織斑君を推薦します」
「じゃあ私はシャドウ君を」

「なら私はソニック君を推薦します」
「ちょっと待った！俺は」
向こうで一夏が織斑教諭に出席簿で叩かれている。痛そうだ。
「ちょっと待ってください納得がいきませんわ！
大体・・・・・・」
向こうでオルコット嬢が何かを言っていらっしゃる。
「そこのあなたたちも聞いていらっしゃるの？」
「悪いが僕達は、何処の国家にも属していないのでな
なんと言われようとも別に関係無い」
「あなたたちは黄色い猿より針鼠と言った方がいいのかしら」
「否定はしない
間違ってはいないからな」
「そこ勝手に話を進めるな」
出席簿で叩かれそうになるのを直前でカオスコントロールを使い回避する
「チッ！」
今舌打ちしたな
「決闘ですわあなたたち」
「了解した」
「いいぜ受けてやる」
「面白いやってやろうじゃん」
「でハンデはどうすんだ？」
・・・・・・（以下原作のやり取りが続く）
「であなたたちはハンデをどうします。」
「オルコットそこまでにしておけ
ハンデはむしろお前に必要だ。」
「それは侮辱『お前はどれだけの時間で教官を倒した』
「３分４６秒ですわ」
「そうか
安心しろソニックは三人相手に五秒

シャドウは私相手に三秒もかけずに勝っている
しかもＩＳ対生身で」
「そんなありえませんわ！」
「折角だ
二人の試合の様子を見せてやる」

皆はビデオ（といっても一分もかかっていないが）を見たあと皆は
驚愕の表情を浮かべオルコット嬢は絶対に喧嘩を売ってはいけない
相手に喧嘩を売ったことに顔色をどんどん青くするのであった

## アンケート

いきなりですがアンケートを実施します。
アンケートの内容は、ソニックキャラの内誰をＩＳの世界に送るかというのとソニックキャラの記憶を本来あるはずの内記憶を異世界に来たことでその記憶を手に入れるかどうかです。
ちなみに現在登場を予定しているのはギゾイドとＥ－１２１とＥ１２３とエッグマン（ヒーローサイド）とテイルスとエッグマンの雑魚メカを出すつもりです。ただヒーローサイドかダークサイドかは決めていませんのでどちらのサイドかも明記してくださると助かります。
それと初めのアンケートはソニックとシャドウ以外一切出さない方がいいという場合はそのように明記してください。
期限は二十日の日曜日です。よろしくお願いします。

## 試合（前書き）

遅くなってすいません。それと暗黒の騎士ネタ多いです。

## 試合

あれから一週間が過ぎついにたたかいの日がやって来た。
戦う順番はシャドウ　ソニック　一夏
オルコットのそう当たり戦（２日かけて）を行い上から二人が代表と副代表になることになった。
まずはソニックとオルコットからだ。
「ちゃんと逃げずに来ましたのね
今一度チャンスを差し上げますわ
泣いて謝るなら許して差し上げないこともなくてよ
というか本当に針鼠の姿ですのね。」
「残念だがそれはチャンスとは言わないな。」
「そう・・・ではお別れですわね」
レーザーライフルがソニックに直撃する
「おかしい！」
「なにが」
「一夏きづかないか？」
「だから何を？」
「簡単なことだ何回か攻撃を受けているがシールドエネルギーが減っていない！」
「確かに」
「当然だ」
シャドウが織斑先生と一緒に来た。
「当然とは」
「シャドウ言っていいな」
「かまわない
彼等なら信頼出来るだろう」
一夏たちの回りには？が飛び交っている
「奴はまだＩＳを展開すらしていない」

「エッ！？あれ普通に音速越してるように見えるけど」
「ソニックはまだ十分の一も力を出していない
見ていればわかる」
ソニックは空に緑色の宝石を掲げる。
「そろそろ近寄らせてもらうぜ
カオスコントロール」
強い光が緑色の宝石から放たれ全員が怯んだあとの光景にはシャドウ以外目を見開いた。
単に男のＩＳ操縦者ということで見に来ていたギャラリーはものめずらしさで見に来ていた時とは違う目で見ていた。
「瞬時加速ごときに」
セシリアはビットとライフルをフルに使って攻撃しているがソニックのホーミングアタックにビットを迎撃されていく。
そしてセシリアはソニックの呟きをききのがさなかった。
「そろそろＩＳを使わせてもらうか。」
「・・・ッ！」
ソニックがそう呟いたあと今度はソニックが光に包まれる。
「行くぜカリバーン！」
光のあとに出てきたのは金の兜を身に付けた青い針鼠の姿だった。
「まさか彼はかの伝説の」
「見せてやるよこれの力を」
ソニックは空に飛び上がりカリバーンを向けこうさけんだ。
「ソウルサージ」
その瞬間セシリアのシールドエネルギーはゼロになりＩＳが解除された。
「不味い」
ソニックは咄嗟にカオスエメラルドを全て取り込みスーパー化して飛んだ。
「オルコット」
綺麗にキャッチして着地したまではよかったがスーパー化の代償と

してソニックは意識を失った。

## 試合（後書き）

どうでもいいですが今回空白とかを含むとピッタリ千字でした。

## ありえない記憶との出会いそして力（前書き）

原作崩壊が激しいです。オリジナル要素がおおいです。

## ありえない記憶との出会いそして力

ＳＯＮＩＣＳＩＤＥ
俺はどうなったんだ？
確かあのとき無理矢理スーパー化して・・・・・・・・
駄目だ思い出せない
「やっと目を覚ましたか」
「お前は・・・・・・・
カリバーン！？
あれ　カリバーン？誰だっけ
そうだあのときのなまくら聖剣『なまくらじゃない』様じゃないか」
でもおかしいな俺がいたのはそんな冒険をする前だった筈。でも記憶がある？本来シャドウは地球に落ちる筈だった？
「ソニックよこれから言うことは全て事実だ。心して聞いてくれ。お前に今宿った記憶は本来経験すべきものの一部だ
今お前がいる世界には
過去
現在
そして未来
の合計２１個のカオスエメラルドがある。
そしてこの世界にはあるエメラルドが眠っておる
またそれはあるもののてによって管理されている
そのうちのひとつはマーダーが持っている
しかしとてもではないが奴等には力が及ばん。だが手がないわけではない。英国にあるものがある
それこそが真のカリバーン　アロンダイト　ガラティン　レヴァーティン
この四つを見付ければ自然と我が身にやどる
その時にあるスキルが使えるようになる

そのなを騎士召喚（ナイトサモン）
と言う。
剣の場所はオルコットの一族が知っておる
あの一族はマリーナとの関係もある
こう言えばなんのことかわかるだろう『疾きこと風のごとくなる蒼き騎士は呪縛の魔女を呪縛から解き放つと』
貴様ならきっとできる
それともう現実世界でも話せるようになっておるのとアロンダイトにランスロットの人格が残っている
うまく使えよ」

セシリアｓｉｄｅ
あの人は強い
我が家オルコットの家に伝わる何故か日本語と英語で書かれた石板に出てきた蒼い騎士アーサー王に似ている
彼は我が家と関わりのある宮廷魔術師マリーナを救い彼は本当の名を遺さずもとの世界に戻った。といわれている。
そう彼は私の父のように母の御機嫌をとるようなタイプじゃない。
何かあったとしても自分の意思以外はきっとこう言うのだろう

・・・・・・・It doesn't matter(関係無い)
と・・・・・・
(BGM It doesn't matter黒騎士版)

SONICSIDE
「・・・・・・・・・・・・・・
知らない天井?
戻って来たのか!?
あれは夢?・・・・・・
でもそんな感じじゃなかった。
「カリバーン・・・・・・話せるって言ってたよな。」
横にある剣に向かって尋ねるように話しかける。
「だからいったであろう
全て事実だと」
剣、もといいカリバーンが話す。
「とりあえず後でオルコットに話しておけ。」
「ああ」
「それと何あっさりたおれとるんじゃ!!」
「はぁ!?ちょっ　お前何いって」
「お前はしばらく風の騎士からヒヨッコ・ザ・ヘッジホッグに逆戻りじゃ」　「いやだから何を言ってるんだよ?そもそもさっきの風のごとくなる青き騎士って俺か?俺のことなのか

そんな大層な名前は遠慮したいぜ
ただの冒険好きの針鼠で結構だぞ」

あれから約一時間カリバーンとこれからの行動について予定をたてていた。
April　seventeen　17：30

side　teacher　orimura
なんなんだ、この話声は？
ここは、今ソニックを休ませている筈
ソニックの声も聞こえるな。
・・・・・起きたのか？

side　sonic　the　hedgehog

誰か・・・・・・・・来る。
「ソニック起きたのか？」
「織斑先生。」
「ほぅ彼女がお主の」
「誰だ！？」
ゲッ
カリバーン余計な事を
「カリバーン挨拶くらいしろよ」
「そうだったな
私としたことが。
私の名はカリバーン御覧の通り聖剣だ。」
「剣が喋った！？」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1034y/

ISに黒い究極の針鼠と音速の青い針鼠が来た

2011年12月21日21時50分発行